

## Matthew Arnold 考 (Ⅱ)

鈴木 昭 一

はじめに

「Matthew Arnold 考 (Ⅰ)」では主として criticism に焦点を当てて、その基本概念を整理し、それが Arnold の主張する culture といかに類似しているかを見た。<sup>1)</sup> その延長線上で、今回は *Culture and Anarchy* (1869) を取り上げ、Arnold の culture とはいかなるものであるかを、もう少し詳しく整理しておきたい。Anarchy の対極にある概念といえば、当然 authority である。本論はまずその辺から議論を始めることとする。

### I. 無秩序か秩序か

1866年、時の首相自由党の Lord John Russell は蔵相 Gladstone とともに、1832年の選挙法改正に続く第二次選挙法改正案を下院に提出し、都市労働者にも選挙権を与えようとした。法案は小差ながら下院を通過したが、「自由党の右翼の一人 Robert Lowe は『現金な、無智な、飲んだくれ』に選挙権を与えることに反対し、法案はあへなく拒否された。」<sup>2)</sup> 上院でこの法案が拒否されると、Edmund Beales や Charles Bradlaugh に指導されて、およそ1万人の群集がハイド・パークにデモ行進し、公園の入り口で警官に閉鎖されると、ついに柵を壊して乱入するという騒動があった。その2週間後、先の2人に指導された群衆が、再びハイド・パークに乱入するという行動が続いた。選挙法改正案の成立に失敗した Russell 内

閣は総辞職し、代って保守党が内閣を組織した。Derby 首相の下で蔵相 Disraeli は、廃案となった法案よりも更に大幅な選挙権の拡張を含む改正案を提出し、1867年にはこの法案が議会を通過した。これをとらえて、「保守党は自由党の入浴中にその衣服を盗んだ」と風刺されたそうである。<sup>3)</sup>

さて、*Culture and Anarchy* として出版されることになる草稿の一部を Arnold が書き始めたのは丁度この頃で、1866年12月には 'Culture and Its Enemies' という評論を構想していたらしい。<sup>4)</sup> Arnold が「ハイド・パーク騒動」に無秩序を見たことは明らかで、機械を超えてその向う側を見ようとする盲目的な「機械信仰」の故に、あらゆる個人や団体が自分(たち)の「好き勝手に振る舞う権利」を主張し始めている、と次のように非難する。

More and more, because of this our blind faith in machinery, because of our want of light to enable us to look beyond machinery to the end for which machinery is valuable, this and that man, and this and that body of men, all over the country, are beginning to assert and put in practice an Englishman's right to do what he likes; *his right to march where he likes, meet where he likes, enter where he likes, hoot as he likes, threaten as he likes, smash as he likes.* All this, I say,

tends to an anarchy. <sup>5)</sup> (italics mine)

Arnold の culture 論が「ハイド・パーク騒動」に触発されたことは間違いないが、彼はデモや乱暴狼藉という現象を論じているだけではない。そういう行動を取らせる心のありよう、とりわけ、イギリス人の国民性に目を向けているという点に注目しておきたい。労働者階級の暴動は、突如として起こったのではなく、その行動パターンの中に「各人好き勝手に振る舞うこと」を良しとする、イギリス人共通の国民性を見ている。

Having, I say, at the bottom of our English hearts a very strong belief in freedom, and a very weak belief in right reason, we are soon silenced when a man pleads the prime right to do as he likes, because this is the prime right for ourselves too. <sup>6)</sup>

各人が気の向くままに振る舞って、一定の秩序が保たれればこれに越したことはない。しかし、「正しき道理」(“right reason”)を信じず、「自由に対する極めて強い信仰」(“a very strong belief in freedom”)を持つが故に、無秩序に陥っているとすれば、そのまま放置する訳にはゆかない。秩序の回復、権威の確立が必要である。その権威をいかにしてイギリスに確立するかが問題である。イギリス人は、自分の所属する階級の思考と行動、つまり「日常的自己」(“ordinary self”)に埋没しているのだから、そこに権威の原理を見いだそうとしても無理である。権威の原理は階級の中にあるのではなく、階級という枠組を越えて、イギリス全体あるいは国家の観念にまで思いを致してこそ生まれてくるものである。かくしてArnoldの頭の中には次の図式が成立することとなる。「自由」に立脚した階級的な「日常的自己」が無秩序を導き出したとすれば、「正しき道理」に立脚する非階級的「最善の自己」(“best self”)

が権威を導き出すしかない、という図式である。ここに至って「正しき道理」あるいは「最善の自己」を希求してやまない culture の必要性がますます強調されることとなる。

By our *best self* we are united, impersonal, at harmony. We are in no peril from giving authority to this, because it is the truest friend we all of us can have; and when anarchy is a danger to us, to this authority we may turn with sure trust. Well, and this is the very self which culture, or the study of perfection, seeks to develop in us; at the expense of our old untransformed self, taking pleasure only in doing what it likes or is used to do, and exposing us to the risk of clashing with every one else who is doing the same! So that our poor culture, which is flouted as so unpractical, leads us to the very ideas capable of meeting the great want of our present embarrassed times! We want an authority, and we find nothing but jealous classes, checks, and a deadlock; culture suggests the idea of *the State*. We find no basis for a firm State-power in our ordinary selves; culture suggests one to us in our *best self*. <sup>7)</sup>

‘The Literary Influence of Academies’ (1864) の中でArnoldは英仏の国民性を比較し、文学の最高裁判所ともいふべきフレンチ・アカデミーのような権威ある機関はイギリスには無理だから、組織的権威によるチェックではなくて、一人ひとりが自らの規範を高めることによってイギリス人に欠けているところを補完するしかない、と言っている。このことは *Culture and Anarchy* でも繰り返されているところで、イギリス人は権威嫌いだから、アカデミーを設立することはあり

えないだろう、と言い切っている。それにもかかわらず、政治に関しては権威が必要だと考えるのは、余程 Arnold の危機感が強かったということになる。あるいは「日常的自己」に対して「最善の自己」という対立概念を想定するためだったろうか。いずれにしても、個人の延長線上にある「最善の自己」という考えを国という組織体に持ち込むことは無理な話で、政治思想としてはこれ程ど粗雑な論建てではありえない。矢本貞幹氏に言わせれば、「彼は社会に存在する他の困難なファクターは考えなかった。社会機構の改革など夢にも思わなかったのだ」<sup>9)</sup>ということになる。この点については、政治家が culture に目を向けなければ国を指導することは不可能だ、と訴えたかったのだと理解しておきたい。というのは、「ハイド・パーク騒動」に敢然と対処できなかった国の指導者たちの無能ぶりにも、Arnold は激しい憤りを覚えているからである。彼らは、一時的な暴動など驚くに値しないとか、自由それ自体が必然的に矯正してくれるとか、いざとなれば動くと言いながら静観の構えを崩さず、一向に有効な手だてを講じなかったのである。言い換えれば、Arnold は「ハイド・パーク騒動」に二重の憤りを覚えたといえる。一つは労働者階級の暴挙に対する憤りであり、もう一つはそれに対処できなかった指導者への憤りである。Arnold にしてみれば、「ハイド・パーク騒動」を眼前にして、「わがイギリスよ、どこへ行く」という沈痛な思いにかられたに違いない。そこで次に「日常的自己」に埋没しているといわれる各階級の様子を整理してみよう。

## II. 3つの階級

Arnold は貴族階級、中流階級、労働者階級、のそれぞれについて階級分析をしている。順を追って整理しようと思うが、その前に Arnold は自分の位置をどうとらえていたか、Arnold 自身の自己規定をまず見ておこう。

イギリスに存在する3つの階級を分析するに当たって、Arnold は具体的な人物をその典型としてとらえ、次のような図式化をはかる。貴族階級の中で中間の位置を占めるのは騎士の態度の持主 Lord Elcho で、その過激派は Sir Thomas Bateson である。中流階級で中間の位置を占めるのは自分達の事業達成を自慢する Mr. Bazley で、その過激派は the Rev. W. Cattle である。労働者階級で中間の位置を占めるのは Mr. Odger で、その過激派は Mr. Bradlaugh である。以上6人の人物を各階級の中間またはその過激派の典型として紹介している。ところが、各階級の特徴をあまり帯びていない人物については列挙していない。貴族階級にあっては「大胆かつ旺盛にならない精神、極端に気の弱い不抵抗性の持主」がそれに当たるが、礼を失してはいけぬので、名前を挙げるのは差し控えるという。労働者階級は目下上昇中の階級だから、それに該当する人物は見当たらない。残る中流階級では「中流階級のな大事業をなす才能のない人物、気の毒にも軽蔑すべき程自己満足の欠如した人物」がそれに該当するが、実はそれに該当する人物は、Arnold その人をおいては他にはいないのである。<sup>9)</sup> 貴族階級にも労働者階級にも穏健派に相当する人物はいない。中流階級の中にたった一人いるが、それは Arnold 自身だという。中流階級にあって、自分こそ「culture のチャンピオン」だと言うためには、他の階級に自分と類似した人物を見いだすのは具合が悪かったということであろう。そこで次に、自分自身を中流階級の穏健派と規定した Arnold の階級観を眺めて見よう。

### 1. 野蛮人 (“Barbarians”)

「野蛮人」というレッテルを貼られた貴族階級が頑固に守って来たのは、何と言っても個人の自由を熱烈に愛する「個人主義」であり、名誉や威厳である。また、男らしさを育て、「野蛮人」の騎士道を身につけるための野外スポーツも大切

にされる。しかし、これは強いて言えば外面的教養とでも言うべきもので、Arnold の考える culture とは程遠いものである。貴族的な優美はあるが、英知に欠ける階級である。

## 2. 俗物 (“Philistines”)

「俗物」と命名された中流階級は、実業と金儲けに明け暮れ、茶話会や演説会といった「機械的生活」に満足する輩で、Arnold の言う優美も英知もない無思想集団である。

## 3. 大衆 (“Populace”)

労働者階級は長らく貧困に喘いできたが、今や「好き勝手に振る舞う」というイギリス人の特権を利用して、辺り構わず行進し、会合し、喚き、破壊する。先に見た無秩序の元凶はこの階級のもので、そこに Arnold の最大の嘆きもある。

This is the old story of our system of checks and every Englishman doing as he likes, which we have already seen to have been convenient enough so long as there were only the Barbarians and the Philistines to do what they liked, but to be getting inconvenient, and productive of anarchy, now that the Populace wants to do what it likes too. 10)

一応の区別は以上の通りであるが、どの階級にも共通するのは「自己満足」で、「野蛮人」は肩幅の広さと優しさを、「俗物」は俗物主義を、「大衆」は同情心と行動力を自慢している。

さて、どの階級も自分達を是認し、そこに自己満足しきっているとすれば、そこから脱却する手だてをどこに見いだしたらいいのだろうか。このとき Arnold は、それぞれの階級の中に存在する「若干の異邦人」に注目する。階級的自己満足は短所ではあるが、よく考えて見れば全階級に共通する要素がなくもない。Arnold は階級の中の異邦人的要素として二つを指摘しているが、その一

つは一般的人間性である。「俗物」と自己規定した Arnold でも、猟銃や釣竿を手にするときには「野蛮人」的感覚を自覚するし、もし「野蛮人」の子として育っていたら、野外スポーツを愛し、それなりの礼儀作法も身につけたであろう。しかし、思想とは無縁の存在だったかもしれない、と思う。また、「大衆」性についても同様で、無知と情熱に動かされて暴力に訴えるとき、あるいは、単なる力や成功を崇拜する彼らの姿に接するとき、もし自分が同じ環境にあったらそうするだろう、と言う。(こういう「大衆」への共感には Arnold が手法として用いたと言われる皮肉を感じさせなくもない。11)「俗物」に所属しながらも、自分の心身に「野蛮人」性、「大衆」性を意識すること、これが3つの階級に共通する一般的人間性である。これは、人間としての同質性の意識といってもいい。しかし、この種の同質性は俗的で、次元が低い。人間には「野蛮人」的なところも、「俗物」的なところも、「大衆」的なところも同時に存在すると認めてみたところで、そこからは何も生まれてこない。もう一つの異邦人的要素の方が大事である。それは、階級を越えて「最善の自己」を求め、完全を追求しようとする精神、いわば culture 志向がどの階級にもあっていいはずだ、とする考えである。このことを Arnold は訴えたいのである。それを明らかにするためには、ヘレニズムとブライズムの関係を考えなければならない。

## III. Arnold の二元論

イギリス人は思索よりも行動に重きを置く。Arnold は、「知識よりも実践をめざす精力」をヘブライズム (“Hebraism”) と名付け、他方「正しい実践の根拠となる諸々の観念をめざす英知」にはヘレニズム (“Hellenism”) という名を与えている。ヘレニズムは、柔軟性をもって「物事があるがままに見ること」を目指す「正しい思索」であり、それ故「意識の自発性」を大切にする。それに対して、ヘブライズムは「神の意志への服従」

「正しい行為」「良心の峻厳」を尊ぶ。ヘレニズムは「無知からの脱却」を目指すのに対して、ヘブライズムは「罪の意識」を問題視する。人間精神の歴史は、この知的側面を強調するヘレニズムと倫理的側面を強調するヘブライズムとの交替劇であった。

原始キリスト教がヨーロッパを支配したのはヘブライズムのなせるところであり、ルネッサンスは人間の知的欲求を高揚させたヘレニズムの成果である。ところが、ルネッサンスとともに入って来た道徳的無関心への反動として、17世紀にはピューリタニズムがイギリスを支配する。問題はこのピューリタニズムの位置付けである。Arnold はそれをヘレニズムの弱点、道徳的な緊張感の無きへの反動ととらえ、歴史の流れの中では支流と位置付ける。

しかし、世のピューリタンはヘブライズムを首位に置いて、「日常的自己」を主張し、「勝手気ままに振る舞うこと」をもって最高の権利と幸福と考えている。よく言えば、神の意志に従い、良心に忠実ではあるが、固定観念に縛られて柔軟性に欠ける。そういうヘブライズムが今はイギリスを支配している。だからこそ、われわれの意識を自由に働かす「意識の自発性」つまりヘレニズムが、今まさに求められているのである。

What I say is, not that Hellenism is always for everybody more wanted than Hebraism, but that for the Rev. W. Cattle at this particular moment, and for the great majority of us his fellow-countrymen, it is more wanted. <sup>12)</sup>

ヘブライズムに対するヘレニズムの導入を力説する Arnold は、その例として「復活」に関する St. Paul の考えについて解釈をしている。<sup>13)</sup> ピューリタンは「復活」を「肉体の物理的の死の後に再びよみ返ること」(“a rising again after the

physical death of the body”) ととらえているが、St. Paul はそのことを認めながらも、力点は「肉体の物理的の死の前によみ返ること」(“a rising to a new life before the physical death of the body, and not after it”) に置かれているのだとし、その例は祈禱書の中にも見られる、と言う。生きながら復活するためには、生きながら死を経験し、その死を通過する必要がある。一度は生身の体を捨て、私利私欲を捨てて、神にすべてを委ねるという死に対する内的経験が必要だということになるだろうか。今にあって今を超える、己にあって己を超える、ということにもなるだろうか。いずれにしろ、「未来における復活」ではなくて「現世における復活」(“resurrection now”) を説く St. Paul あるいは Arnold の見解は、人間の生き方、人生の意味といったことを考えさせてくれる点で興味深い。しかし、宗教を論ずる立場にない私には、いささか荷が重すぎるので、これ以上深入りするのは差し控えておくのが賢明だろう。

St. Paul はユダヤ人の機械的な考え方、形骸化した規律を批判することによって、キリスト教に生き生きとした道徳意識を再生させた。その手法はヘブライズムにヘレニズムを持ち込んだものである。その手法に習ってピューリタンを見るに、金儲けをして世に頭角を現したいという誘惑の前に、彼らは厳格な廉直の精神を忘れ、思想と実践とに大混乱をもたらしている。これがピューリタンの固定観念のせいだとしたら、ヘレニズムの力を借りて、もう一度ピューリタニズムを見直す必要がある、と Arnold は主張する。後に Arnold が宗教論を展開せずにはおれなくなる布石が、すでにここにある。

St. Paul はヘブライズムにヘレニズムを導入した。しかし、それは道徳的な枠組の中だけであった。今 Arnold は、単に道徳のレベルに留まるのではなくて、人間活動のすべての面にわたってヘレニズムを導入しようとする。そのとき目につくのはイギリス人の通俗的な三大目標である。産

業・スポーツ・自由の3つがそれで、中流階級はこれら3つを人生最大の目標として信奉し、それらさえ達成されれば満足で、人間的完成という理想などとは全く無縁の世界に生きている。金儲けのための産業主義、体力増強のためのスポーツ振興そして自由のための自由信仰という、俗物的な三大目標を克服するためには、固定観念や習慣に対して「自由にして新鮮な目」を向けさせてくれるヘレニズムの精神が、絶対必要になってくるのである。

#### IV. 社会批評の実例

Cultureの効用を説くArnoldは、その応用編として当時問題になっていた「アイルランド教会の国立廃止運動」「無遺言土地相続法案」「亡妻の妹との結婚を許可しようとする企て」そして「自由貿易政策」の4つを取り上げて、それぞれに批判を試みる。まず最初の「アイルランド教会の国立廃止運動」の根底には、新教的非国教徒の国立教会に対する反感があるのであり、筋が通っていないという。「無遺言土地相続法案」は、遺言を残さず死んだ人の土地は長男だけでなく、他の子供にも平等に分配すべきだという主張であるが、これに対してもArnoldは封建的慣習と土地相続法の方がより良いと考える。「亡妻の妹との結婚」についても、その主張の仕方に問題があるとして、反対している。最後の「自由貿易政策」についても、富の増大をもたらそうとするこの政策が、実は貧民の増大をまねいているに過ぎないとして、反対している。この反対論にはなかなか迫力があるので、その要点を整理しておこう。

「自由貿易政策」は富の生産と貿易・商業の活性化、それに人口の増加をもたらすもので、人口が増えれば生産もそれに歩調を合わせて増える、とする政策である。しかし、エリザベス朝以来、人口の増加とともに絹靴下の生産は増えたが、パンとベーコンは人口の増加に比例して増えてはいない。Arnoldは皮肉をこめて「貧乏人のパンを

より安く、より豊富にするというよりも、パンを食べる、あるいは食べることでできない貧乏人をより多く生産しているに過ぎない」と主張する。ロンドンの東部を見れば、病気がちの子供達や栄養が悪く、体つきも貧弱な子供達が、あちこちに満ち溢れている。ロンドン東部の貧しさを、これもまた皮肉をこめて、次のように描写する。

A line of poetry, which Mr. Robert Buchanan throws in presently after the poetical prose I have quoted, —  
'Tis the old story of the fig-leaf time—  
this fine line, too, naturally connects itself, when one is in the East of London, with the idea of God's desire to swarm the earth with beings; because the swarming of the earth with beings does indeed, in the East of London, so seem to revive the old story of the fig-leaf time, such a number of the people one meets there having hardly a rag to cover them; and the more the swarming goes on, the more it promises to revive this old story. <sup>14)</sup>

富の増産というかけ声は、実は貧者の増産と同義である、とArnoldは言いたいのである。人口の増加は貧者の増加であり、貧乏人の子沢山を礼讃することなどんでもないことで、それは「自由貿易政策」の失敗、為政者の無策を意味する以外の何物でもないのである。こういう「自由貿易政策」への反対論には、長年視学官として活躍し、ロンドンの東部をつぶさに視察した経験のあるArnoldの目がひときわ光っている。

#### V. 社会批評

以前私は、cultureの概念は文学上のcriticismという概念を社会批評に持ち込んだものである、と言った。そこでcriticismについて整理したの

と同じ観点で、culture についても整理しておこう。

### 1. 社会批評の基本

Criticism が「対象をその本質においてあるがままに見ること」を基本としたのと同様、culture もまた「物事があるがままに見ること」(“to see things as they really are”)をその基本に据えている。

また、脱利害や公平無視についても「カルチャーとは人間の完全を利心なく追求する努力」(“culture is the disinterested endeavour after man's perfection.”)なのだから、人間の宗教的側面についてもそれを全面否定するようなことはしない、と言う。

Culture, disinterestedly trying, in its aim at perfection, to see things as they really are, sees how worthy and divine a thing is the religious side in man, though it is not the whole of man.<sup>15)</sup>

もう一点、社会批評の基本として Arnold が強調するのは、「思考の柔軟性」である。固定観念や習慣に囚われず、自由に精神的な内面活動を展開することが、社会批評にとっては不可欠である。イギリス中にはびこっている「機械主義」「地方人根性」を克服する手段として、これは欠かせない。

客観的に物事を見ること、利害に囚われず公平に把握すること、その上、思考と精神の柔軟性をもって物事に対処すること、これらが社会批評の基本である。言い換えれば、それらは、culture がその役割を十分に発揮するための手段であり、道具であり、武器である。

### 2. 社会批評の基準

社会批評の基準についても、criticism でいう

「この世で知られ、考えられている最善のもの」に照らして判断すべきである、と主張していることに変わりはない。ただし、固定観念の打破、因習打破を最大目標とする Arnold は、必ずしも「この世の最善のもの」にこだわらなくてもいいかのような言い方もしている。

If a man without books or reading, or reading nothing but his letters and the newspapers, gets nevertheless a fresh and free play of the best thoughts upon his stock notions and habits, he has got culture. He has got that for which we prize and recommend culture; he has got that which at the present moment we seek culture that it may give us. This inward operation is the very life and essence of culture, as we conceive it.<sup>16)</sup>

こういう Arnold の言葉を額面通りに受け取っていいとすれば、culture のための基準はもはや存在しなくなる。しかし、ここでは本を所有し、読書をしていれば、それで教養を身につけていると考える旧来の教養人への戒めと受け取った方がよさそうである。つまり読書の有無が問題なのではなくて、自由な発想で既成観念に対処しうるかどうかという「思考の柔軟性」を訴えたいのである。

次に *Culture and Anarchy* に見られる Arnold の「試金石」は誰かといえば、宗教界では文中しばしば引用されている Bishop Wilson と St. Paul が挙げられよう。またヘレニズムの必要性を力説する Arnold が、Socrates と Plato をその「試金石」としているのは当然といえる。ヨーロッパ的視野で発想する Arnold にとっては、時にはフランス、時にはドイツが国としての「試金石」になる。

## 3. 社会批評の目的

Criticism の目的は「最善の思想を広めることによって世の中に思想の大潮流を巻き起こし、そうすることによって創作上の画期的な大時代を到来させたい」ということであった。それと同様の目的が culture にあって否定されるはずはない。社会批評の目的が、未来の理想社会建設のためにあることは、今更言うまでもない。そのためにこそ culture の任務があるのだから、Arnold は永遠の自己教育を訴えて *Culture and Anarchy* を結んでいる。

We, indeed, pretend to educate no one, for we are still engaged in trying to clear and educate ourselves. But we are sure that the endeavour to reach, through culture, the firm intelligible law of things, — we are sure that the detaching ourselves from our stock notions and habits, — that a more free play of consciousness, an increased desire for sweetness and light, and all the bent which we call Hellenising, is the master-impulse even now of the life of our nation and of humanity, — somewhat obscurely perhaps for this actual moment, but decisively and certainly for the immediate future ; and that those who work for this are the sovereign educators.<sup>17)</sup>

以上のことをふまえてみると、社会批評としての culture の基本理念が、Arnold の意識の中では criticism とほぼ同義だということは明らかである。しかし、culture は criticism よりも包含する範囲がもう少し広い。Culture は、人間の美しさと価値を作るすべての円満な発展を目指す故に、「宗教を越えている」と言う。また culture は詩と同一の精神を持ち、詩と同一の法則に従う、とも言う。しかし、多くの大衆に影響を与えると

いう点では、宗教の方が詩よりも上位にくる。つまり、Arnold の考えるところでは、culture は詩を含み、宗教をも包みこんだ存在である。Arnold の culture をとらえて、当時の批評家は「カルチャーという宗教」<sup>18)</sup> (“religion of culture”) と評したようだが、culture は詩と宗教を越えているという Arnold の認識をとらえて言ったものであろう。T. S. Eliot は「文化と宗教とのあいだに一つの関係は無造作に想定したということが恐らくアーノルドの『教養と無秩序』の最も根本的な弱みでありましょう」<sup>19)</sup> と指摘する。こう指摘する Eliot の根底には「一民族の文化は、<sup>インカーネーション</sup>本質的には、その民族の宗教の（いわば）肉化ではないか」<sup>20)</sup> とする強烈な宗教意識が働いていることは確かである。

Eliot はもう一つ重要な指摘をじている。Culture は、個人の発展、集団または階級の発展、社会全体の発展という3つの相ととらえる必要があるにもかかわらず、Arnold は、3つの階級を「その階級に欠けたるもののゆえに非難するにとどまって、各階級の本質の機能もしくは『完成』が何であるべきかを考察するところまでには行っていない」<sup>21)</sup> と批判する。しかし、Arnold を弁護して言うならば、*Culture and Anarchy* で Arnold が射程に入れているのは、決して貴族階級でも労働者階級でもないということである。特に労働者階級については「その階級の水準まで降りて教えようとはしない」<sup>22)</sup> と明言しているところからも明らかである。Arnold の狙う射程が中流階級にあることは明らかで、その中流階級に「最善の自己」への志向を訴えることで、イギリスをなんとか救おうとしたのではないだろうか。

その他、Eliot に言わせると、Arnold は広い正確な知識の持主ではないし、「地獄を歩いたこともなければ、天国の喜びに心をうばわれたこともない。」<sup>23)</sup> 従って「恐怖や栄光をみきわめる力もない」<sup>24)</sup> と批判されている。にもかかわらず、Eliot は「彼の弟子としてではなくて、我々と同



じ考え方をする人間として彼を読む<sup>25)</sup>と語り、「アノルドは我々にとっては指導者であるよりも、友人なのである<sup>26)</sup>と語っているところに、同時代人としての Eliot の基本姿勢がある。この点は Kenneth Allot も同意するところで、「T. S. エリオット氏のみが彼のただ一人のライヴァルである。これら二人の批評家は、さまざまな点で互いに補足し合って完全になる<sup>27)</sup>と評価している。

おわりに

前川祐一氏は「アーノルドの教養主義」を紹介して、「さらば（汝の天の父の全きが如く）汝らも全かれ」（*Estote ergo vos perfecti!*）という第二版（1875）のエピグラフが、人間の完全さをささえる「甘美と光明（Sweetness and Light）」さらに社会の完全さをささえる「ヘブライ主義とギリシア主義」（Hebraism and Hellenism）の各論を経て、アーノルドの教養主義にまで止揚統一されるのは当然のなりゆきであった<sup>28)</sup>と言う。しかし私には Arnold の主張は、対立する二つのものを並列した二元論に思えてならない。確かに、理想としてはヘレニズムとヘブライズムとの調和のとれた発展を願っている。しかし、ルネッサンスを本流、ピューリタニズムを支流と位置づけ、ヘブライズムにヘレニズムを注入することが必要である、といった言葉からすると、ヘレニズム礼賛に傾いている。「美」と「真」つまり「甘美」と「光明」の合体したものが culture だと主張はしているが、その力点は明らかに「真」に置かれている。Arnold が「総体的完全を追及するもの」として culture を主張しているとしても、だから彼の言う culture は弁証法的に止揚統一されたものととらえるのは、いささか無理なのではないだろうか。

Arnold の言う culture は、純粋な知的欲求としての科学的情熱と善を行おうとする社会的情熱の両面を持っている。言い換えれば、culture に

は「個人的教養」と「社会的文化」という2つの要素がある。しかし、「最善の自己」を権威の理論的根拠とする発想から見ても、力点は「個人的教養」に置かれているといえよう。敢えて言えば、「個人的教養」：「社会的文化」を7：3くらいの比率でとらえていたのではないだろうか。同じようにヘレニズム：ヘブライズムも7：3の比率で考え、「真」：「美」についても同様に7：3くらいの比率で論じた二元論だと理解した方が分かり易い。

Arnold は、自らを「お上品な保守的懐疑思想の持主」と呼んでいる通り、すべてに対して懐疑的である。「脱利害」をモットーとし、超然として「物事があるがままに見よう」とすれば、懐疑的にならざるをえなかったのだろう。と同時に、保守的であるのもまた当然である。*Culture and Anarchy* には 'An Essay in Political and Social Criticism' という副題がついてはいるが、政治思想家でも社会学者でもなかった Arnold に、いわゆる政治批評、社会批評としてのパースペクティブがあったとは思われない。現象として眼前に映し出される歪んだ映像に惑わされることなく、あくまでも「ものの本質」を見通す眼力を養い、より良き改革のために精神的土壌を耕しておこう、と努力したのが Matthew Arnold であった。その意味で、*Culture and Anarchy* は政治論でも社会論でもなく、啓蒙の書、思想の書、人生の書として読まれるのは当然であろう。

注

- 1) 「長野県短期大学紀要」第44号, pp. 183—194
- 2) 多田英次訳『教養と無秩序』の「あとがき」（岩波文庫, 昭和34年版）p. 304
- 3) 長島伸一『世紀末までの大英帝国——近代イギリス社会生活史素描』（法政大学出版会, 1988）p. 188 及び大野真弓編『世界各国史Ⅰイギリス史』（新版）（山川出版社, 昭和49年）p. 220参照
- 4) *Culture and Anarchy* の出版経過については Matthew Arnold: *Culture and Anarchy, The Complete Prose Works of Matthew Arnold V*

- ed. by Super (The University of Michigan Press, 1965) pp.408—417 参照
- 5) Matthew Arnold: *Culture and Anarchy* (Kenkyusha, 8th pr. 1961) p.76  
「Matthew Arnold 考 (I)」と整合性を持たせるため、引用は Kenkyusha 版による。
  - 6) *ibid.* p.79
  - 7) *ibid.* pp.95, 96
  - 8) 矢本貞幹『イギリス文学思想史』(研究社, 1969) p.185
  - 9) Kenkyusha, *op.cit.* p.99
  - 10) *ibid.* p.121
  - 11) Super (ed.) *op.cit.* p.414
  - 12) Kenkyusha, *op.cit.* p.151
  - 13) *ibid.* pp.153, 154
  - 14) *ibid.* pp.191, 192
  - 15) *ibid.* pp.30, 31
  - 16) *ibid.* p.7
  - 17) *ibid.* pp.212, 213
  - 18) *ibid.* p.72
  - 19) エリオット著/深瀬基寛訳「文化の定義のための覚書」, 『エリオット全集Ⅴ 文化論』(中央公論社, 昭和35年) p.248
  - 20) 同書 p.249
  - 21) 同書 p.240
  - 22) Kenkyusha, *op.cit.* p.70
  - 23) エリオット著/上田 保訳「マッシュュー・アーノルド」, 「詩の効用と批評の効用」の中の一章, 『エリオット全集Ⅲ 詩論・詩劇論』(中央公論社, 昭和35年) p.135
  - 24) 同書 p.137
  - 25) エリオット著/吉田健一訳「アーノルドとペイター」, 『エリオット全集Ⅳ 詩人論』(中央公論社, 昭和35年) p.408
  - 26) 同書 p.410
  - 27) ケネス・アロット著/山田泰司訳『アーノルド』(英文学ハンドブック——「作家と作品」<第2期 No.43>, 研究社, 昭和46年) p.49
  - 28) 前川祐一「アーノルドの教養主義」, 『講座英米文学史12』(大修館書店, 1971) p.72